

## 文芸とともに

のむら  
埜村 和美

「再びの函館山は見えぬ目の胸の記憶に重ねる夜景」

これは当時 46 歳だった私の、2 度目の北海道の旅の時に作った短歌です。私が始めて北海道を訪れたのは 24 歳の 5 月でした。5 月の後半とは言え、現地はまだまだ寒く、扇形に開いた夜景が震えているように見えたことを覚えています。

しかし、2 度目の北海道旅行は、すっかり視力の落ちた私の視覚以外の感覚器官を精一杯使った旅となりました。30 代の終わりから 40 代の初めにかけて相次いで両親を亡くした私は空虚感に浸る中で、移ろう時の流れや物事に大変敏感になりました。そんな日々の思いを短歌や俳句に表してみたいと思うようになったのです。三十一文字の短歌は、最初は指を折りながらのたどたどしいものでした。しかし時を経るごとに、ことばの流れが気持ちよく感じられるようになりました。

視覚障害者は旅の先々で、その風景を写真や動画に撮るのは、大変難しいことです。しかし短歌や俳句なら、その時、心に写ったものや肌に感じたものを作品として残すことができます。そして短い韻律の中に大きな世界観を味わえる醍醐味は、胸踊るものがありました。私も視覚障害者の会員として、各地の大会に参加する中で、様々な出会いがありました。

「六尺の身の丈とう竜馬像のブーツにふれつつ勇姿を偲ぶ」

この短歌は、盲女性大会・長崎大会での、竜馬の像に触れた時の一首です。仰ぎ見た大きな竜馬の像が今でも目の前に立ち上がります。

「溪谷に蔓をあみたる吊橋の谷風に聞く落人の声」

これは日視連全国大会・徳島大会で、祖谷の吊橋の上を歩いた時の作品です。揺れる吊橋に怖い思いをしましたが、雄大な吉野川の流れの音は、今でも耳の奥にあります。

「ブロンズの少年の下肢しなやかに走り出すかに陽の中に立つ」

これは、甲府の芸術の森公園にある少年の像に触れた時の一首で、その若さと躍動感が私の指に伝わってきました。

俳句では、次の三句が好きな自作です。

「秋高し老棟梁の声の艶」

「秋の冷え硬貨を落とす貯金箱」

「小鋏の鈴の音かすか梅雨に入る」

一句目は、老棟梁のきびきびした指図の音が澄んだ秋の空に響くと感じたもの。二句目は、貯金箱に落としたコインの音が冷えた空気を震わせて聞こえたことを詠んだものです。三句目は、裁縫仕事の最後に小鈴をつけた鋏を使った時の作。どの作品も目の不自由な私の聴覚や触覚に響いて生

まれたもののように思います。

俳句や短歌を作るためには、やはり私はその場所の空気の匂いや風の流れ、人々の話し声や直接手に触れるものなど、そんな中から材料を見つけます。外出は、体験のきっかけを作る大切な要素です。体を動かすことは、心を動かすことにも通じるような気がします。

最近では川柳や連歌の会にも入会させていただき、様々な方の感性に触れる喜びを知りました。これらの文芸を学ぶことのできる幸せをかみしめ、私を気持ちよく受け入れ、これまでご指導して下さった諸先生方や仲間の皆様に感謝するとともに、これから経験するであろういろいろなことにわくわくしながら、人生を心豊かに楽しんでいきたいと思っています。